

論考部門

職人がいない
技能者不足の理由を
紐解く

〈2015年10月〉

蟹澤宏剛

建設業の魅力を向上する必要があること、職人の処遇を向上し若者の入職を促進する必要があることは、少なくとも著者が学生だったバブル絶頂期には既に声高に叫ばれていたことです。しかし、バブル崩壊後は、むしろ建設業者と技能者は供給過剰とされ、業界は泥沼のダンピング合戦で疲弊し、結果、賃金は低迷し、この業界から多くの人が去って行きました。職人の大切さを認識し、社会保険加入や訓練の充実などに真摯に取り組んだ会社もありましたが、競争という名のダンピングに敗れて倒産した会社も少なからずあります。

私は、こんな状況を学生から若手研究者、大学教員に至る過程で間近に見続け、職人の親方や専門工事会社の番頭さん達から「正直者が馬鹿を見ぬような仕組みを提案してくれ」と叱咤されてきました。残念なことに、志半ばで亡くなられた方もいます。

私は政治家や官僚ではありません。よって、出来ることは、資料やデータを集め、足を使って見聞を深めて客観的に現状を記述し、どこに構造的問題があって、解決するには何をすべきかを世に提案することです。

こんな想いで綴った拙文を読者と選考委員の皆様へ評価していただけたことを、大変光栄に思っています。ありがとうございました。



蟹澤宏剛

かにさわ ひろたけ

1965年東京都生まれ。千葉大学大学院博士課程修了。博士（工学）。工学院大学、法政大学非常勤講師、ものづくり大学専任講師を経て2005年芝浦工業大学助教授、2009年より現職。専門は、建築生産システム、建築構法（特に木造建築）。現在、国土交通省の建設産業活性化会議委員、建設産業戦略的広報推進協議会顧問、社会保険未加入対策推進協議会会長、建設産業担い手確保・育成コンソーシアムアドバイザー、関東地方整備局 事業評価監視委員会委員、就労履歴管理システム（仮称）の構築に向けた官民コンソーシアム委員などを務めている。

論考部門

かたい形、やわらかい形
—オリガミの
構造形態学—

〈2015年11月〉

館 知宏

「折紙」は建築においてなじみの深いテーマです。折紙を使った構造の考え方は先人たちにより提案されていますし、何より日本人にとっては、子供の頃に触れたことのある「懐かしい」ものです。

だからといって可能性は尽くされているかというと、そんなことはありません。いま、Origamiはサイエンスやネイチャーなどの雑誌でも常連の最先端のキーワードです。

いま何が脚光を浴びているのかというと、その学際性です。幾何学・計算科学といった理論的な視点、材料科学・ロボティクス・建築構造などの応用的視点、そして芸術・文化としての視点など、視点が変われば同じテーマが全く新しい見え方をします。領域を横断した研究やコラボレーションを通して多くの成果が導かれています。そこには、未解決の問題を一つ解くと、それに関連する十個の未知の問題がでてくる、といったエキサイティングな世界が広がっています。

「形態にあらわれた構造」特集は、まさに学術領域を橋渡しするような特集でした。

今回、その各論として書いた拙稿が賞をいただけることとなり、たいへん光栄に思います。



館 知宏

たち ともひろ

1982年つくば市生まれ。私立武蔵高校、東京大学建築学科卒業。同大学院修士課程・博士課程終了。博士（工学）。2010年より東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学系助教。計算折紙（コンピュータショナル・オリガミ）と空間構造・構造形態学の研究を行っている。『Origamizer』『FreeForm Origami』などの折紙設計のためのシステム開発を行いウェブページにて公開している。

論考部門

建築と社会を考える
—一つの試論—

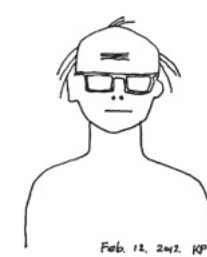
〈2015年10月〉

舟橋國男

読者と選ぶ「建築と社会」賞を授与して下さる拙稿は、日本建築協会創立百年を目前に始まった連載「建築と社会を考える」の「総論」ということになっている。しかしそれは、浅薄なとりとめもない彷徨の域を出ず、さしたる中心的な問題や有意な考え方を提示できた訳ではない。また、引続く「各論」との打合せも調整もないままであったから、連載開始の「総論」に相応しいとは言えず、筆者の独り善がり過ぎに過ぎない故に「一つの試論」と言い訳した。特に、拙稿に伏在している、「建築」に対する畏敬と反撥のアンビヴァレントな想念と「建築家」や「作品」に対する批判的イデオロギーとは共に拭い難く、「あるべき建築の創造」を目指して日々邁進されているであろう建築界の各位には受け容れ難い言辞もあると想像している。ただ筆者は、身過ぎ世過ぎの「研究教育」と併行して、長年に亘って（と言っても高高半世紀足らずだが）、「建築」の社会科学を妄想してきたことは間違いないなく、これからも「建築社会研究」なる僭称のもと多面的課題を経巡り続けるだろうと思う。

このような怪しげな「論考」に賞を与えて下さるのは、愚考の危なっかしい徘徊に対する、日本建築協会と読者各位からの、取り敢えずのご寛容と差し当りの叱咤激励（？）だと有難く受け止めさせていただきたい。

与えられるであろう講評を惧れつつ、心からの謝意を表します。



舟橋國男

ふなはし くにお

1940年、大阪市生まれ。1964年大阪大学工学部構築工学科卒業、同大学院修士課程修了、同博士課程単位取得退学。大阪大学助手・講師・助教授・教授を経て、2004年3月定年退官。大阪大学名誉教授。建築計画学、環境行動論を専攻。近年「建築社会研究」を模索。「環境行動論に関する一連の研究」により1997年度日本建築学会賞（論文）受賞。編著「建築計画読本」2004年、大阪大学出版会。